

## 日系ブラジル人の子どもの健康を守る活動について

大谷かがり

私は、2003年から日系ブラジル人の子どもたちの健康を守るための活動を行っている。本稿では、今までの活動を紹介し、日系ブラジル人の子どもたちを取り巻く現状、彼らの健康問題、今後の展望について述べたい。

### 今までの活動について

私は2003年から、豊田市を中心に活動している外国人医療支援グループに参加し、日系ブラジル人の子どもたちの健康を守るための活動を行っている。このグループは、豊田市内外に在住する外国人が日本人と同様な医療サービスを受けられるよう支援活動を行うことを目的として、1998年に発足した。2004年度から保見団地周辺のブラジル人学校4校に通う子どもたちを対象に、健康相談会を実施している。私は看護師なので、この会で問診を担当している。ブラジル人学校は、日本の法律では学校と認められていないので、学校保健法の対象ではない。ブラジル人学校は、人員、予算ともに余裕がなく、子どもたちの健康管理にまで手が回らない。健康相談会には毎年約50名の子どもたちが

参加する。

この健康相談会の特徴は、スクリーニングでなく保護者の話を聞くことに主眼を置いていることである。日本語が良く分からず、毎日朝から晩まで働いて身体的にも精神的にも参っている保護者の話を聞くことは、間接的に子どもたちの健康状態の把握に役だつ。問診では、子どもの日常生活についても聞いていく。子どもたちがどのような食事をしているのか、保護者が働いている間どのように過ごしているのか、などについて聞いていくと、保護者が過酷な労働条件の中で働いていることが見えてくる。私たちは子どもの話を聞いているのだが、いつの間にか保護者の悩み相談に変わっている。



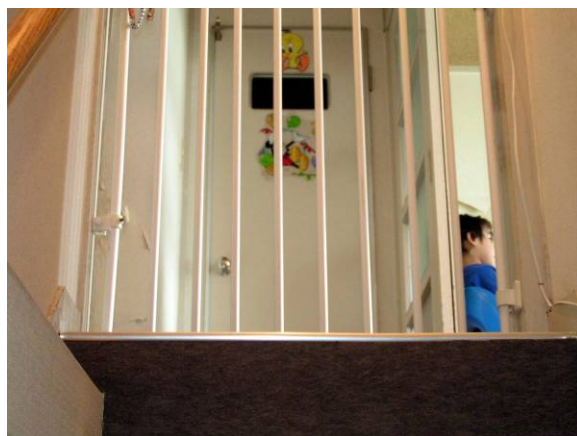
保見団地：食育ワークショップにて

2007年8月から12月まで、本グループは愛知県多文化共生社会づくり推進事業の委託を受け、「地域で支える外国人の健康推進」事業を行った。在住外国人の依頼を受け、病院や役所へ付き添うコミュニティの通訳者、ブラジル人学校の先生、外国人医療支援グループスタッフが、外国籍の子どもたちの健康をテーマに4回のワークショップを実施し、延べ90人参加した。このワークショップでは、在住外国人の健康保持、増進のために必要なスキルや仕組みについて共に考えた。

このグループとは別に、大谷コンサウジ・チームというスペシャル・チームを作り、2006年6月から2007年5月まで、社団法人地域問題研究所の助成を受け（第13回社団法人地域問題研究所活動助成事業）、日系ブラジル人の子どもたちの健康問題をさらに詳しく調べるため、ブラジル人学校、託児アパート、日本語学校を定期的に訪問調査した。保見団地には、朝早くから夜遅くまで在住外国人の子どもを預かる人々がいる。彼らは自宅のアパートの部屋の大半を使って託児を行っている。このような自宅を託児アパートと呼んでいる。この調査と平行して外国籍の子どもたちを対象に食育ワークショップも行った。

NPO 法人トルシーダの活動にも参加させていただいている。2005年度は、トルシーダが愛知県多文化共生教育支援事業の委託を受けて行った「保見子どもの教育まるっとネット」に参加し、託児アパートやブラジル人学校の調査や、食育ワークショップを行った。2006年8月から9月まで、豊田市教育委員会が行った、外国人児童生徒不就学調査にトルシーダのメンバーとともに

参加した。私はブラジル国籍の子どもたちの自宅を訪問調査し、保護者の話をうかがった。



託児アパートの入り口

#### 活動から見えてくることー保見団地の場合

保見団地に暮らす日系ブラジル人の多くは、ブラジルでは低階層ではなく、レストランや雑貨店の経営者、学校の先生、会社員、小規模農場の元経営者などといった人びとである。しかし日本にデカセギにいくと、朝早くから夜遅くまで働き、日本語がよくわからないので、日本の情報が届きにくく、日本の公共にアクセスしにくくなる。デカセギ業は仕事の都合で引越しが絶えない。派遣会社と労働契約を結び、仕事が無くなると、翌日には新しい仕事のある町へと引越していく。日本にきて最初に暮らした市町村で外国人登録をしたが、次の引越し先では外国人登録をしなかったということが頻繁にある。こうなると暮らしている行政からの情報が届かなくなる。保見団地に暮らす日系ブラジル人の場合、休日はアウトレットモール、大型電気量販店、大型スーパーなどに出かけるので、暮らしている地域にいる時間は少なく、自治会に入

会する日系ブラジル人も少ない。

保見団地に暮らす日系ブラジル人の多くは、日本に定住するつもりがない。彼らは、そのうちブラジルに帰るつもりなので、日本の行政の情報がポルトガル語で届いても感心が低く、読まない。帰国後の生活を考えて、子どもをブラジル人学校に行かせる。保見団地周辺のブラジル人学校の月謝は平均 45,000 円（別途送迎費がかかる）かかるので、払えなくなる保護者もいる。払えるが、高いことを理由に子どもを退学させる保護者もいる。

定住するつもりがなかったのに、貯金がそこをついた、仕事がない、ローンが払えず破産した、体調を崩し働けないなどの理由から、ブラジルに帰れる可能性が低くなってくると、精神的なバランスを崩し始める。

### 子どもたちの健康問題

保見団地に住む子どもは、約 4 割が朝食を食べない。食べると言っても、コーヒーを飲むだけという子どもも少なくない。保見団地の日系ブラジル人の間では、栄養ドリンクは身体に必要な栄養素がすべて入っているマルチな食品だと信じられており、毎朝栄養ドリンク 2 本を食事代わりに飲んでいる子どももいた。保見団地周辺のブラジル人学校 2 校、託児アパートでは、朝食を食べず、集中力がない、倦怠感を訴える子どもが多いことから、朝食を提供している。

アメリカ疾病管理予防センター（CDC）の BMI 表を用いて肥満度を判定すると、毎年約 20%の子どもが over weight である。at

risk of overweigh も含めると、約 4 割の子どもたちが肥満傾向にある。保護者の多くが、週に 3、4 回残業をしている。子どもたちはお腹が空くので、間食用にこずかいをもらっている。あるブラジル人学校の先生が「90 年代以降生まれた子どもたちは、コーラが大好きなので、ブラジルでコココーラ・ジェネレーションと呼ばれている」と言っていたが、子どもたちは 1 日に何本もコーラ、ガラナを飲む。保見団地にはいくつか公園があるが、子どもたちはテレビゲームや衛星テレビ放送でブラジルの番組を見ることのほうが好きなので、うちの中で遊ぶことのほうが多い。こういった要因が、肥満に影響している。



託児アパートでの午前のおやつ



託児アパートでの食事：フェジョン、サラダ、オムレツ、ご飯

問診では喘息、アトピー性皮膚炎に関する悩み相談が多い。季節の変わり目に喘息やアトピー性皮膚炎が悪化することがあるが、喘息の大発作が起きて救急車で運ばれる子どももいる。そのほかに、慢性腎不全、高血圧などを抱える子どももいる。高血圧の子どもの場合、肥満である場合も多い。

### 子どもたちの健康問題の背景—保護者たちはどのように対応しているのか

日系ブラジル人は、子どもを病院に連れて行きたいが、さまざまな理由で病院から足が遠のく。1つめの理由は、仕事である。彼らは派遣会社と労働契約を結び、時給で働いている。休むとその時間の給料が手に入らないし、休みをもらおうと翌日から首になることもあるので、仕事を休みにくい。2つめは日本語が話せないことである。病状を伝えたくてもうまく伝えられないのはとてももどかしく、つらい。3つめは、医療保険に加入していないことである。豊田市の外国人住民の国民健康保険加入数は5138名、加入率 35.05%である（経済社会総合研究所主催、第25回 ESRI—経済政策フォーラム議事録より。財団法人豊田市国際交流協会理事兼事務局長、倉橋竣俊氏（平成19年3月末退職）の報告資料。<http://www.esri.go.jp/jp/forum1/menu.html>、2007年5月30日）。医療保険に加入していない場合、例えば風邪を引いて病院に行っても、支払いは150%から200%とかなり割高となる。診察料は病院が自由に設定できる。4つめはブラジルと医療システムが異なることである。

彼らは、子どもを病院に連れて行かない

代わりに、ブラジルの親戚から薬を取り寄せて、今までの経験上一番良いと思った方法で飲ませる。あるいは、ブラジル人コミュニティに出回っているサプリメントを飲ませる。日本の薬は、コミュニティの通訳者、ブラジル人のカウンセラーなど信用している人から買う。薬の成分は、総合ビタミン剤、カルシウム剤などで、特に病気に効くというものではない。コミュニティに出回っている薬を飲んだり、取り寄せた薬を自分流に解釈して飲んでみたりしても、子どもの病気はよくなるらない。

そこで彼らは、ブラジル人学校の先生、託児アパートの経営者、コミュニティの通訳者、団地内で活動する NPO スタッフに相談する。相談される人びとは、ブラジル人が生活をする上でなくてはならないものに携わっている。学校、託児（これがないとお母さんたちは朝早くから夜遅くまで働けない）、通訳（通訳してもらわないと、車の運転免許証を申請したり、入国管理局の書類を提出したりできない）などである。NPO スタッフは豊田市の委託事業を請け、彼らの生活をサポートしている。

相談は、子どもの病状の説明からはじま



夜の保見団地

り、一生懸命に治そうと努力しているが一向に回復しないというなげきである。しかしいつの間にか、家庭生活、彼氏や彼女とのもめごと、親類とのトラブル、離婚問題などといった、悩み相談に発展し、「このような苦労を抱えていても、私は子どものことに一生懸命に取り組んでいるんだ、がんばっているんだ」という訴えに変わっていく。

相談される立場の人びとは、ブラジル人コミュニティのアンテナのような存在である。日系ブラジル人は彼らを頼りにし、必要な情報が何かしら得られるのではないかと思っ、相談にやってくる。

## これからの課題

日系ブラジル人の子どもの健康問題に取り組んでいると、あまりにディープで生々しい出来事が多くあり、引き込まれると圧倒されて心が揺らぐときがある。活動を通じて感じるのは、「日本社会に同化できない＝落ちこぼれ」という日本の風潮である。私が出会ってきた日系ブラジル人の多くは、自分たちは落ちこぼれている、劣っていると感じ、一方で、日本社会で正統性を獲得したいと考えていた。そのような実態が、特に医療、健康問題の実践を通じて、よく

見えてくる。

私を実感したのは、日系ブラジル人の子どもの健康を守るためには、健康問題だけを見ては解決しないということである。子どもたちの健康問題の背景には、食生活、保護者の労働条件、金銭問題、公共との関わりなど、日常生活を送る上で必要なことが複雑に絡み合っていて影響しあっている。子どもたちの健康問題に取り組むには、日系ブラジル人の方々、ブラジル人学校の先生、託児アパートの経営者、コミュニティの通訳者、団地内で活動する NPO スタッフと一緒に、日系ブラジル人の視点から、これらの問題をどのように考え解決すべきかを話し合い、取り組むことが必要であると考えている。

## 参考文献

- ・NPO 法人トルシーダ『愛知県多文化共生教育支援事業 保見子どもの教育まるっとネット事業報告』(2005)
- ・外国人医療支援グループ『2004 年度健康相談会報告書』(2004)
- ・同『2005 年度保見外国人児童・生徒健康相談会アンケート結果報告書』中京大学社会学部齊藤研究室発行 (2006)
- ・同『2006 年度健康相談会報告書』(2007)

## 著者プロフィール

大谷かがり (OOTANI Kagari) 国際文化研究科博士後期課程院生

■略歴：静岡県出身。1994 年浜松市立看護専門学校看護第一学科卒業。1994 年から 1998 年まで静岡県にある県西部浜松医療センターの消化器、乳腺、口腔外科の慢性期病棟で働く。2003 年愛知県立大学文学部日本文化学科卒業。2005 年名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻基礎看護学分野修士課程修了。2006 年まで中京大学大学院社会学研究科研究生。2007 年より愛知

県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程に在籍。専門は医療人類学。2003年より、豊田市を中心に活動している外国人医療支援グループに参加。外国籍の子どもたちの健康相談会に携わっている。豊田市の保見団地でフィールドワークを行うとともに、定期的にブラジル人学校、託児アパートを訪問している。

■これまでの研究や活動：助成を受けた研究として、2005年愛知県多文化共生教育支援事業「保見子どもの教育まるとネ



ワークショップにて

ット」(NPO法人トルシーダ)、2006年外国人児童生徒不就学調査(豊田市教育委員会)、2007年愛知県多文化共生社会づくり推進事業、社会参画活動育成事業「地域で支える外国人の健康推進」(外国人医療支援グループ)に参加。2006年「日系ブラジル人の子どもたちの健康を守る」(第13回社団法人地域問題研究所の活動助成)を行う。

- ・「乳癌を患う女性の経験」『中京大学大学院社会学研究科院生論集』第5号(2006)
- ・「なぜ看護学でライフヒストリー研究が行われるのか」『中京大学大学院社会学研究科院生論集』第6号(2007)
- ・「日系ブラジル人の子どもたちの健康を守る」『地域問題研究』vol.74(2007)
- ・「日系ブラジル人の子どもたちをめぐる社会空間ー日本語教室のある日の出来事からー」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第9号(2008)

■これからの研究や活動：日系ブラジル人の子どもたちの健康問題に取り組んで5年目。ときどきポルトガル語で医療相談の電話がかかってくるようになり、保見地区のブラジル人コミュニティの保健システムに組み込まれたなど実感しています。せつかくの大学院生活なので、どっぷりとフィールドにつかるつもりです。

■「共生」について：ある日系ブラジル人の方から「私の話に耳を傾けてほしい」と言われ、以前病院で余命いくばくもない乳がんを患った女性から「私を事例と呼ばないでほしい、ひとりの人間として付き合ってください」と言われたことを思い出します。日系ブラジル人の方々が地域で暮らす人々となるために、行政にその権利をずっと主張してきたけれど、ボランティアと行政の議論を日系ブラジル人の方々はどう見ていたのかな、と自分を振り返りました。共生とは、隣の人の話をじっくりと聞くことから始まるのかな、と思う今日この頃です。